

評論
雜篇

全三十四卷 第二十回配本

昭和三十三年三月十二日 第一刷發行 ©

漱石全集 第二十一卷

定價百五十圓

著者 夏目漱石

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地 岩波雄二郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五番地 山田一雄

發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋三ノ三
株式會社

岩波書店

落丁本・剽丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

目次

評論

道樂と職業

一一

現代日本の開化

三三

中味と形式

五四

文藝と道徳

七三

文展と藝術

九三

素人と黒人

一二〇

私の個人主義

一二九

津田青楓君の畫

一五八

點頭錄

一六一

雜篇

入社の辭

一八一

『虞美人草』豫告

一八四

〔自著を贈る言葉〕

一八五

『三四郎』豫告

一八五

『それから』豫告

一八六

元日

一八六

霞寶會設立主旨

一八八

稟告

一八九

〔子規書幅添書〕

一八九

〔學位問題に就いて〕

一九〇

余と萬年筆

一九一

明治天皇奉悼之辭

一九五

『彼岸過迄』獻辭

一九五

行人續稿に就て

一九六

『心』廣告文

一九六

序 文

小羊物語に題す十句 — 小松武治譯『沙翁物語集』序 —

一九九

浦瀨 白雨 譯『ウォルツヲオスの詩』序

二〇一

『吾輩は猫である』上篇自序

二〇二

『漾虛集』自序

二〇四

『吾輩は猫である』中篇自序

二〇五

『鶉籠』自序

二〇八

鈴木三
重吉作『千代紙』序

二〇九

平井
晩村著『野葡萄』序

二一〇

『吾輩は猫である』下篇自序

二一一

藪野
椋十著『東京見物』序

二一二

本間久
四郎譯『名著新譯』序

二一三

森田草平
川下江村
生田長江
共著『草雲雀』序

二一五

生田
長江著『文學入門』序

二一七

高濱
虛子著『鶏頭』序

二一九

松根東
洋城選『新春夏秋冬』春之部序

二一八

沼波
天目杜南共編『古今名流俳句談』序

二一九

松根東 洋城選 『新春夏秋冬』夏之部序

二三九

松根東 洋城選 『新春夏秋冬』秋之部序

二三一

樋口 銅牛著 『俳諧新研究』序

二三一

森田 草平著 『煤煙』第一卷序

二三三

中村 不折畫 『不折俳畫』上序

二三五

自然を離れんとする藝術

——『新日本畫譜』の序——

二三七

池邊君の史論に就て

——『明治維新三大政治家』再版序——

二四一

『土』に就て

——長塚節著『土』序——

二四六

秋元 梧樓編 『三愚集』序

二五二

秋元 梧樓編 『明治百俳家短冊帖』天之卷序

二五三

高原 蟹堂著 『極北日本』序

二五三

『社會と自分』自序

二五五

ふち 子作 『相模の埃』 紹介

二五六

野上八重子 譯 『傳説の時代』 序

二五七

想田 秋曉 編 『高岳』 題言

二六〇

米窪 刀雄 著 『海のロマンス』 序

二六一

保坂 歸一 著 『吾輩の見たる亞米利加』 下篇序

二六三

岡本 一平 著 並畫 『探訪畫趣』 序

二六四

『心』 自序

二六七

木村 恒譯 『南國へ』 再版序

二六八

木下 太郎 著 『唐草表紙』 序

二六九

『硝子戸の中』 自序

二七四

植松 安譯 『文藝批評論』 序

二七五

縮刷に際して

—— 縮刷『社會と自分』 自序 ——

二七七

『金剛草』自序

二七七

題丙辰潑墨

——不折山人著『丙辰潑墨』第一集序——

二七九

解說

二八一

注解

二九三

評

論

道樂と職業

——明治四十四年八月明石に於て述——

唯今は牧君^{*}の滿洲問題——滿洲の過去と滿洲の未來といふやうな問題に就いて、大變條理の明かな、さうして秩序のよい演説がありました。そこで牧君の披露に依ると、其のあとへ出る私は一段と面白い話をするといふやうになつて居るが、なか／＼牧君のやうに旨く出来ませぬ。殊に秩序が無からうと思ふ。唯今本社の人^{*}が明日の新聞に出すんだから、講演の梗概を二十行ばかりにつづめて書けといふ注文でしたが、それは書けないと言つて斷つた位です。それぢやア饒舌^{しゃべ}らないかといふと、現に斯うやつて饒舌^{しゃべ}りつゝある。饒舌^{しゃべ}る事はあるのですが、秩序とか何とか云ふ事が、ハツキリ句^く切りが附いて頭に疊み込んでありませぬから、

或は前後したり、混雜したり、いろ／＼お聴きにくい所があるだらうと思ひます。殊にあなた方の頭も大分勞れておいでせうから、先づ成るべく短かく申さうと思ふ。

私の申すのは少しもむづかしいことではありません。滿洲とか安南とかいふ對外問題とは違つて極^{ごく}やさしい「道樂と職業」といふ至極簡單なみだしです。内容も従つて簡單なものであります。まあそれを一寸僅かばかり御話をしやうと思ふ。

元來こんな所へ來て講演をしやうなどは全く思ひもよらぬことでありましたが、「是非出て來い」と斯ういふ譯で、それでは何か問題を考へなければならぬから其問題を考へる時間を與へて呉れと言ひましたら、社の方では宜しいと云つて相應の日子を與へて呉れました。ですから考へて來ないといふことも言へず、出て來ないといふことも無論言へず、それでとう／＼此所へ現はれる事になりました。けれども明石といふ所

は、海水浴をやる土地とは知つて居ましたが、演説をやる所とは、昨夜到着するまでも知りませんでした。

どうしてあゝいふ所で講演會を開く積りか、一寸其の意を得るに苦しんだ位であります。ところが來て見ると非常に大きな建物があつて、彼處で講演をやるのだと人から教へられて始めて尤もだと思ひました。成程あれ程の建物を造れば其中で講演をする人を何處から呼ばなければ所謂寶の持腐れになる許でありませう。従つて西日がカン／＼照つて暑くはあるが、折角の建物に對しても、あなた方は來て見る必要があります、又我々は講演をする義務があるとでも言はうか、まアあるものとして此壇上に立つた譯である。

そこで「道樂と職業」といふ題。道樂と云ひますと、悪い意味に取るとお酒を飲んだり、又は何か花柳社會へ入つたりする、俗に道樂息子と云ひますね、あゝいふ息子のする仕業、それを形容して道樂といふ。けれども私の此處で云ふ道樂は、そんな狭い意味で使ふの

ではない、もう少し廣く應用の利く道樂である。善い意味、善い意味の道樂といふ字が使へるか使へないか、それは知りませぬが、段々話して行く中に分るだらうと思ふ。若し使へなかつたら悪い意味にすればそれで宜いのであります。

道樂と職業、一方に道樂といふ字を置いて、一方に職業といふ字を置いたのは、丁度東と西といふやうなもので、南北或は水火、つまり道樂と職業が相闘ふ所を話さうと、斯ういふ譯である。即ち道樂と職業といふものは、どういふやうに關係して、どういふやうに食ひ違つて居るかといふことを先づ話して——尤も其の道樂も職業も、既に御承知のあなた方にさういふ事を言ふ必要もなし、私も強ひてやりたくはないが、併し前申した様な譯でわざ／＼出て來たものだから、そこはあなた方に既に御分りになつて居る程度以上に、一步でももう少し明かに分らせることが、私の力では來れば夫で私の役目は濟んだものと内々高を括つてゐる

るのであります。

夫で我々は一口によく職業と云ひますが、私此の間も人に話したのですが、日本に今職業が何種類あつて、それが昔に比べてどの位の數に殖えて居るかといふことを知つて居る人は、恐らく無いだらうと思ふ。現今の世の中では職業の數は煩雜になつて居る。私は曾て大學に職業學といふ講座を設けてはどうかといふことを考へた事がある。建議しやしませぬが、唯考へたこととがあるのです。何故だといふと、多くの學生が大學を出る。最高等の教育の府を出る。勿論天下の秀才が出るものと假定しまして、さうして其の秀才が出てから何をして居るかといふと、何か糊口の口がないか何か生活の手蔓はないかと朝から晩迄搜して歩いて居る。天下の秀才を何かないか何かないかと血眼にさせて遊ばせて置くのは不經濟の話で、一日遊ばせて置けば一日の損である。二日遊ばせて置けば二日の損である。殊に昨今の様に米價の高い時は尙更の損である。一日

も早く職業を與へれば、父兄も安心するし當人も安心する。國家社會も夫丈利益を受ける。それで四方八方良いことだらけになるのであるけれども、其秀才が夢中に奔走して、汗をダラ／＼垂らしながら搜して居るにも拘はらず、所謂職業といふものが餘り無い様です。餘り所かなか／＼無い。今言ふ通り天下に職業の種類が何百種何千種あるか分らない位分布配列されてゐるに拘らず、何處へでも融通が利くべき筈の秀才が懸命に馳け廻つてゐるにも拘らず、自分の生命を託すべき職業がなか／＼無い。三箇月も四箇月も遊んで居る人があるのでは是は氣の毒だと思ふと、豈計らんや既に一年も二年もボンヤリして下宿に入つて爲すこともなく暮して居るものがある。現に私の知つてゐる者のうちで、一年以上も下宿に立て籠つて、未だに下宿料を一文も拂はないで茫然としてゐる男がある。尤も下宿の方でも信用して居るから貸して置くし、當人もどうかなるだらうと思つて安心はして居るらしいが國家の經

濟からいふと随分馬鹿氣た話であります。私も多少知つて居る間柄だから氣の毒に思つて、職業は無いか職業は無いか位人に尋ねて見るが、何處にもさう云ふ口が轉がつてゐないので残念ながらまだ其儘になつてゐます。けれども今言ふ通り職業の種類が何百通りもあるのだから、理窟から云へば何處かへ打付かつて然るべき筈だと思ふのです。丁度嫁を貰ふやうなもので自分の嫁は何處かにあるに極つてゐるし、又向ふでも搜して居るのは明らかな話したが、つい行く行かないと何時迄も結婚が後れて仕舞ふ。それと同じでいくら秀才でも職業に打付からなければ仕様がなひのでせう。だから大學に職業學といふ講座があつて、職業は學理的にどういふやうに發展するものである。又どういふ時世にはどんな職業が自然の進化の原則として出て来るものである。と一々明細に説明してやつて、例へば東京市の地圖が牛込區とか小石川區とか何區とかハツキリ分つてゐるやうに、職業の分化發展の意味も區域も盛

衰も一目の下に瞭然會得出来るやうな仕掛にして、さうして自分の好きな所へ飛び込ましたら洵に便利ぢやないかと思ふ。まあ是は空想です。實際やつて見ないから分らぬが、恐らく出來ますまい。出來たら宜からうと思ふ丈です。非常に經濟なことにはなるでせう。

斯んな考を起す程に私は今の日本に職業が非常に澤山あるし、又其職業が混亂錯雜してゐる様に思ふのです。現に此の間も往來を通つたら妙な商賣がありまして。それは家とか土藏とかを引きずつて行くといふ商賣なんだから私は驚いたのであります。此の公會堂を此の儘他の場所へ持つて行くといふ商賣です。いくら東京に市區改正が激しく行はれたつて、さう毎年建てたばかりの家の位置を動かさなければならぬといふやうに變化して居やアしない。現に私の家などは建つた時から今日まで市區改正に掛らずに居る。餘程邊鄙な所にあるのだからでせう。けれども縦令繁華な所に居たつて、さう始終家を引ツ張ツてツて貰はなければな